SH-19 1957年設計
筋違をなくす一つの方法

ピンでもラーメンでもない構造

　SH-19は、富士製鉄が軽量形鋼の生産を開拓するのに際して、この材料の実験的な使用例として試作した同社の課長社宅であって、この建物の構造はピンでもラーメンでもない特殊な方法がとられている。
　柱と壁を切離して、筋違いがあまりじゃまにならなくなったとはいえ、やはり斜めの×印が窓の外にあるのはいかにもうるさいことは否定できない。
そこでこの邪魔な筋違いを取り除く一つの方法として、基礎のなかに柱を埋め込んで、丁度電柱や樹木のような堀立て柱を立て並べ、これに横力や屋根の重さを支えさせて、この柱の上に屋根と天井を机の甲板と同じ要領で乗せた。
　こうすれば筋違いはもちろん要らなくなるし屋根と柱との取り合いもピンで良いので簡単になる。加えて柱もさして負担を受けないから経済的にできると考えた。
　この構造はすでに14・15・16の各住宅でもつかっていたので技術的にはさほど困難ではなかったのだが、将来完全な組み立て住宅にする場合とか、柱脚部の坊錆、基礎コンクリート打の誤差がかなり大きく柱に影響するなどの点で若干問題を残していた。
　住宅が量産になる一つ前の段階として屋根のコンクリート打の仮棒に天井下地を兼ねさせて、無駄な材料は極力使わない方法をとっている。
　この建物のように、床を地面と平に作ることの利点は庭と部屋とが切れ目なく繋がって、狭い部屋も広く使えるということにある。
　こうした長所を出来るだけ有効にいかすために、敷地全体を住居と考えて、風とか雨のような自然の攻撃から生活を守るためにだけ屋根や外壁という仕切りで一部を囲うという方法が考えられた。
　敷地の境界が高い塀で囲まれている代わりに、仕切りは全て硝子張りの開放的な扱いをしてあり、屋根の下まで池が入り込んできたり建物の裏側である北にも広い庭が作られているのは、建物と庭を切離された別のものではなく一体の空間として 自由に広々と楽しめるようにしたいと意図したからである。
　北側を南側と同様広くとったために、暗くじめじめしやすい場所が明るく乾燥した場所になったし、今の床に切れ目なく続く池は空間に変化と涼味を与えている。南の庭から北の庭まで平に続く今の広々とした感じは平な床と平らな天井というSH-13以降の鉄骨住宅の特徴を最も効果的に示している。
　敷地全体のこうした利用法は、狭い敷地に立てる場合には特に有効である。